

二四三五六

伏見 語録

伏見 康治

I. 原子党宣言を書いた渡辺^{さとし}君逝く

1993年10月15日早朝、上智大学の柳瀬睦男さんから電話、渡辺君が容態急変で聖ルカ病院に入院、お見舞いにかれた方がよいと言われた。この日、午後3時半から日佛会館で、坂井光夫さん主催の日佛理工会30周年の会があり、面白そうなので出席の予定。ひる過ぎに出かけて、聖ルカに立ち寄ってから、日佛に向うことにしようと思った。

昼めしを済ませてから、西新橋の事務所に向う。段々病院に見舞いに行くのが億劫になる。渡辺君は3年前から頭をやられて、人に会うのを嫌がっていた。3年前に電話したら、「どなたにもお会いしないことにしています」とそっけない返事。それ以来、柳瀬さんから見舞いを勧められながら、一度も尋ねたことがなかった。事務所で秘書さんたちと彼のことを話題にしながら、遂に私は病院に行かなかった。あんなに

も俊敏な頭脳を持った人の、衰えた姿に接するのは忍びなかった。

日佛会館でフランス留学の思い出話をうかがっていて面白かったが、最後の弥永昌吉先生の話になったとき、司会の坂井さんのところに電話メッセージ、それは、午後1時45分頃渡辺君永眠の知らせであった。

夜晩く帰宅すると、豊田利幸さんから電話。方々新聞社に渡辺先生死亡のことを伝えたが、「渡辺さんって誰ですか」ときゝ返す始末で、近頃の新聞記者の不勉強にはがっかりさせられますという。お葬式の次第がきました。19日火曜日の1時半から、芝公園の聖アンドレ教

目次：I. 原子党宣言を書いた渡辺^{さとし}君逝く

伏見 康治

II. 十年の学友伏見君の横顔

渡辺 憲

会で、と伝えてくれた。私伏見は小学校時代をこの教会のすぐ前で過ごしたので、よく知っているところである。

翌16日麻布の「がま池」前の渡辺邸を尋ねる。ホームマット・プリンスというマンションになっている。その1階部分が渡辺邸である。(去年、このがま池がテレビの対象になって、その時渡辺君の姿をちらっと見た)。亡骸がベッドの上に据えられて白い布に包まれていた。まわりを白い花が蓋っていた。別室で、暫くぶりに今は遺児となった元^{はじめ}さんに会った。カルフォルニアのセントバーバラ大学で、哲学を教えている。電報で呼び返されたが、臨終には間に合わなかった由。遺夫妻はそろってハワイ大学の教授を長いこと勤めていて、その間ハワイと東京の間を行ったりきたりしていたが、3年前から、東京を動かなくなった。ハワイの借家の後始末が仲々大変だったことなどを話されていた。東京での老夫婦の世話は主として御親戚の五味さんが面倒見して下さった由。

帰途、統計数理研究所に立ち寄り、来年の「形の知、知の形」国際会議の準備会に出席。だいぶ晩くなって帰宅。

10月19日火曜日、早昼を済ませて、家内満枝と共に出る。東横線、日比谷線で、神谷町下車、飯倉の交差点で芝公園側に曲ってすぐ聖公会聖アンドレ教会、すぐ元さんに会う。参会者の内、親戚は右側、友人が左側で、その一番前にすわらせられる。私たちの左隣りに豊田さん、その左に柳瀬さん、この3人が教会行事の後で追悼の言葉を述べることになっている。参会者の多

くは、旧東京高等学校の同級生。

以下は、その席で私が述べた弔辞 — と言うよりは追憶の辞である(印刷に際して、大分敷衍した)。

伏見康治です。皆様のお許しを得て、故渡辺君についての憶い出のいくつかを申し上げ、故人を偲ぶことにしたいと思います。

渡辺君は1910年の生れですが、この年はハレー彗星が現れたので有名です。慧という名前はそれに因んで付けられたと承っております。

(そう言えばキリスト降誕の年にも彗星が現われたという伝説があります)。このことを仲間で話題にしたとき、ハレー彗星は60年毎に現れるそうだから、もう一回現れるときまでことによると吾々も生きているかも知れない、見たいものだと言いつたのでした。実際はハレー彗星の周期は70何年かで、だいぶ延びましたが、それでも吾々はその再来を見ることができました。予想より長生きしたのではないのでしょうか。私は渡辺君の生涯が短かすぎたとは考えません。私は彼より一年年上ですが、少し長生きしすぎたと思っています。

私たちは、今はもうない東京高等学校で7年間、東大の物理で3年間、併せて10年間の学友ということになります。しかし高校生の頃はそれほど親密な交際をしたわけではなく、むしろ今日のこの席に見えている平田克己君、山本連郎君、水谷當称君等々の方が多くの思い出を持っ

ておいでであろうと思います。

一つだけ高校時代の思い出を申し上げますと、高等科二年生のときでしょうか、小脇に新刊の堅い本をかかえて颯爽と歩いていましたが、それは竹内時男編著「波動力学論叢」という、ド・ブロキや、シュレーディンガーの初期の論文を集めたものでした。その頃私は、世界の物理学界が量子力学即波動力学の完成でわきかえっていることなど、少しも知りませんでしたので、渡辺君の世界の風潮を感じとるセンスの良さに感嘆したものでした。

大学にはいったからは、量子論の創始者プランクの「熱力学」を選んで、一緒に読みました。余りよい本ではなかったと思いますが、その中に出てくる「非可逆性」「エントロピーの増大」の話は渡辺さんの哲学的思弁を大いに刺激したように思います。後年、「時間」、特にその一方向的な、非可逆的な遷移について多くの思索を重ねられた、その出発点になったと思います。

渡辺君は、西欧の進化の思想に限りない尊敬と愛着を感じ、日本の退嬰的な陋習にいつも挑戦していましたが、一方で古い良い風習を守っていました。お天気博士として有名な藤原咲平先生は、気象学を講じておられました。この藤原先生は渡辺君の同郷の大先輩なのだそうで、私も連れこんで講義を聴きに行きました。この大先生は全くの八方破れの先生で、ある時などやおら鞆から論文別刷りをとり出して、これは面白そうだから読んできかせようと、黒板に向けて論文を読み始められたのですが、いつまで経っても読み終らない。30分程、われわれに背

中を向けたままでしたが、やおら立ち上って、今日はこれで終わらしましょうと言われたのには、あっけにとられたのでした。この講義には気象学演習というのがついていて、その点をとらないと卒業できないとか。演習というのが、各地の測候所で計測データが貯ったままになっているのを、利用させようという趣旨で、たとえば中央気象台の気温と柿岡測候所の湿度の相関をとれと言ったような題を与えられるときいて、私たち2人は恐慌をきたし、何とかこの人権無視の演習を回避しようと対策を考えました。藤原先生は気象学上のパラドクスを色々説明されましたが、「角運動量非保存の法則」、「水平動優越の法則」、「横抵抗の法則」の三つが、特に印象に残っていました。この内のどれかを種にして理論を作ろうということになりました。角運動量の話は水泳飛びこみの選手が、飛び立ったときには廻っていないのに、途中でぐるぐる廻るから、角運動量は明らかに一定ではないように見えるというのですが、これは藤原先生の思い違いが余りにはっきりしていて、取り上げないことにしました。水平動優越の方を伏見が料理することにしましたが、何も面白いことになりませんでした。渡辺君は横抵抗の法則をとり上げました。これは、高気圧から低気圧に向って風が吹くべきなのに実際は殆ど直角に外れて吹くという。風向の観測から出てきた法則で、普通は地球の回転に基くコリオリの力で説明されるものです。

しかし私たちは、地球は動かないものとし、代わりに流体の中に渦が充滿していると考えたら

同じ効果が出るはずだとして、そういう流体の運動方程式を樹てました。渡辺君は、その頃相對性理論をものにしようと考えてでしょうか、テンソル算の形式を勉強していましたから、そのテンソル算の記法に従って、新しい流体力学の基礎方程式を書きおろしたのです。これを論文にしたてて、藤原先生に提出したら、先生は大変よろこばれて、次世代の学生たちに紹介されたそうですが、しかし誰もこの方程式を使わなかったようです。

この藤原先生の紹介で渡辺君は理化研究所の寺田寅彦教授の研究室に出入りするようになりました。寺田先生は物理教室の先生でしたから東大理学部物理教室で接触すればよかったです。その頃寺田先生は僅かに講義をしにこられるだけで、研究は専ら理研でお弟子さん相手にやっておられたのです。時間的前後が狂うのをいとわずに申し上げますと、渡辺君の理研における研究は、いかにも寺田物理学的なものです。私の知るかぎり「割れ目」と「たどん」があります。硝子板に粘土か何か水に溶いて塗りつけて、日にさらして置くと、ひび割れができます。そのひびの形の研究です。古いひびに新しいひびが交わるときには必ず直角になるのだと教えられました。たどんの研究は、灰の中に埋めたたどんが燃えるためには灰の表面から酸素が供給されなければなりません。その表面にブリキ板を置いて部分的に蓋うと、それに応じてたどんの燃える部分が変ってくるというものでした。

渡辺君は、親しい人には限りなくやさしい人でしたが、しかし同時に理屈に合わないことや人に対しては極めて攻撃的でした。たとえば、物理教室の学生たちは、年末必ずニュートン祭と称するお祭り騒ぎをすることになっていましたが、勝手に委員を買って出た人たちが、強制的に会費をとり立てたというので、大反発をされたりしました。それも東大新聞に投書したりまでしたのです。東高が野尻湖畔に寮を作った時、私たちは合宿して遊びましたが、その時渡辺君は上遠野君と口論になり、とっ組み合いの大喧嘩になって仲裁に骨を折ったことなど思い出されます。正義感の強い人であったと言えるでしょうか。

大学も三年目になると、渡辺君は殆ど大学に顔を見せなくなりました。実はアテネ・フランセに通ってフランス語に磨きをかけていたので。彼は外国語をしゃべり、また聴くことが極めて堪能で、物理より或いは語学の方が面白かったのではないのでしょうか。口癖のように言っていたのは、「日本の学者はしゃべるのが下手で、国際関係で損をしているから、自分が通訳者として日本の学者を国際舞台に引き出してやろうと思う」でした。私はその日本の学者の一人で、読み書きは良いとしても、会話は全く苦手でしたから、もっと渡辺君に厄介をかけたらよかったと思います。

— これはだいぶ後年のことになりますが、京都で何か国際会議があった後で、日本学術会

議の副会長をしていた佛文学者の桑原武夫氏がこう言ったのを覚えています。渡辺君があるドイツ人と話しこんでいたとき、うしろからぼんと肩をたたいたフランス人がいた。渡辺君はふり返り様、今までのドイツ語からたちまちフランス語に切換えてしゃべり始めた、と言うのでした。アテネ・フランセに通いながら、渡辺君はド・プロキの「波動力学」を翻訳して、岩波書店から出版しました。卒業後、しばらく理研にいたと思ったら、その頃できた日佛交換学生の制度によって、あっと言う間にパリに留学してしまいました。東高の同級生で生化学を専攻した江上不二男君も日佛交換学生の制度を始めに利用した人です。結果から見ると、渡辺君は東高時代からド・プロキのところに行く予定表を作っていたのでしょうか。

ド・プロキのところで、非可逆性に関する論文を書いて、ドクトル・デタをとられました。ドクトルにも色々な階級があるが、これは一番偉いドクトルなのだと説明されました。いずれにせよ、学生時代に一緒に読んだブランクの影響なのかと思って私はよろこんだのでした。

パリに3年いて、一ぺん帰ってきました。この帰朝の前後に大恋愛事件が起り、それが収束するまで相当悩んだのではないのでしょうか。渡辺君は元子爵であり、外国人のお嫁さんをとることに家族の反対が多かったのであると思います。大阪帝国大学で講師をしていた私の下宿、土佐堀川に面したYMCAに、暫く逃避していました。その後から母上が折れて、追いかけてこられて、漸く話が納まったようでした。この

事件の一部始終を知っているのは、東高同級生の江上不二男君でしょうが、彼は久しく前に他界されています。

渡辺君の新婚生活はドイツで始まりました。ライプツィヒのハイゼンベルクのところに遊学、どういう資金によるのか私は知りません。ハイゼンベルクの指導でしょうか、原子核構造論を追求して、ポーア流の液滴模型に反して、「砂袋模型」なる説を唱えていました。

その内、1939年ヨーロッパの大戦が始まって帰国、理研や東大に籍を置いたようです。その頃私は結婚して初めての子供、長女康子が生れた頃ですが、渡辺家を訪れたときに、渡辺家には長男元君が生れていることを知りました。

(ライプツィヒで生れた赤ん坊をつれて、コペンハーゲン経由アメリカを通過して帰国したのである) 相当の遺産であったのでしょうか、こんな苦しい思いは二度としたくないと言って、ヒルデ夫人は、元さんのために買った色々なものを他人に別けていたので、私たちも思いがけない恩恵を受けました。中でも「歩行器」というのが、いかにもドイツ製の頑丈な作りで、もちがよかったことを憶えています。長女康子以後併せて4人の子供が全部この歩行器に厄介になりました。その後もこの歩行器は、私の阪大におけるお弟子さんたちの家庭に使われて、前後十何人の赤ん坊たちに使われたこととなります。ドイツ製品の頑丈さを示すと共に、ヒルデ夫人の博愛の精神の現われとも言えるでしょう。けれども夫人自身はその後戦中戦後の惨めな日本の生活で、大変な苦勞をされました。ドイツ的

教養を身につけておられ、決して贅沢な方ではなかったのですが、白いパン、白い牛乳、白い砂糖が無ければ生きていけない生活習慣が身についていた彼女は大変な苦勞をしなければならなかったのです。

敗戦後、渡辺君は「原子党宣言」を、「中央公論」1948年2月号に発表して、人々を驚かせました。これはマルクスの共産党宣言の形をまねて、しかし共産党のドグマを、原子兵器の出現に象徴されるような科学技術の進化を信じる立場から批判した文章なのです。（原子兵器を作ったのは、労働者ではなくて、科学技術者である！）これは Ampanius 氏なる人の文章で、それをしかるべく発表してくれるように頼まれたという形になっていますが、このアンパニウスは、渡辺君が東高時代にアンパンとう字名を持っていたところから、それをもじって考え出した名前なのですが、「原子党宣言」の文章*を少し抜き書きして見ましょう。

「一個の怪物が全世界を徘徊している。すなわち、原子爆弾の怪物である。しかし、この怪物は世界を救おうとしている。

原子爆弾をつくったのはなにか、資本か、工業力か、労働か、否、否、否。それは人間の独創的知性である。原子力は、創造的知性の所産

*「原子党宣言」は『中央公論』1948年2月号に発表された。「フランスの社会主義の進化——渡辺憲初期論文集」（1990年12月20日・思想の科学社）に収録されている。

であるとともに、その象徴であり、武器である。

原子力を生み出す科学的能力を有し、原子力を駆使するに値する道徳的水準を保持する一団の知性が、H市に集合して、つぎの宣言を起草した。

プロレタリアはこの百年間、彼らの労働こそが、価値を生み出しているのだと独断してきた。しかし今や事情は完全に変わってしまった。労働者なしの工業は既実現せられ、漸次多くの生産分野を占領し始めている。そしてこの第二次機械革命を完遂せしめつつあるものは、原子力の産業への利用である。かくの如き無労働時代は、今や目前に近づきつつある。プロレタリアは社会の寄生動物に化さんとしている。

しからば、かかる無労働時代の真の生産者は誰か、それは、機械によって置き換えることを得ざる創造的知性である。それは原子力を解放し、無労働工業を設計する科学的頭脳であり、それを人類の幸福なる発展にのみ操作する良心である。さらに、精神的価値を生み出す芸術家、哲学者、宗教家がこれである。これらを總称して、第五階級という。……」

後は略しますが、渡辺君は、この文章を「万国の創造的知性よ、団結せよ！」と結んでいます。——今になって考えて見ますと、原子力に対していささか過大な期待をかけすぎている嫌いがありますが、創造的知性を大切にしなければいけないことだけは永遠の真理であろうとは思いますが。

以上がだいたい葬儀の席で私がしゃべったことである。もちろん国際結婚のいきさつなど、機微に属することは、話を文字にするときに付け加えたものである。

戦争で帰国した渡辺君は、千葉にできた東大の第二工学部にはいって助教授になった。恐らく、東高時代の力学の先生であった山内恭彦先生の関係であったのだろう。戦後になって立教大学の教授になった。私はずっと大阪にいたので、東京で渡辺君が色々な面で活躍していることをよく承知していないので、主として彼の書いたもので、その業績をうかがってみたい。

先に引用した『フランス社会主義の進化、渡辺憲初期論文集』の内容の大部は、『思想の科学』という雑誌に載せたもので、彼が当時の軽薄な社会主義思想に対抗して、社会主義思想がいかん歴史を通して鍛えられてきたかを教えるものであった。「原子党宣言」はそういう博識の上に立った文章であることを注意して置こう。

しかし同時にこの時期から、渡辺君は「時間」というものに興味をもって、様々な角度からその面を描き始めた。私の本棚にある時間に関する本を列記してみると、

『時間』：白日書院、1948年刊。

序文の終りに「私が時間という捉えがたいものに興味を感じるようになったのは、全く私の父が、幼い私に、そういった問題について、しばしば議論を仕掛けて来たからに外ならないと考えている。それでこの書を彼に捧げる」（彼の父とは子爵渡辺千冬のこと）

『時』：河出書房新社、1974年刊。

これは前著の、四半世紀後の再刊。

『時間の歴史—物理学を貫くもの—』：

東京図書、1973年刊。

「あとがき」を見ると、「この本が市場に現れる頃にはちょうど、国際時間学会の第二次世界大会が、日本で開かれているではありませんか…」とある。

『時間と人間』 著者は渡辺憲、渡辺ドロテアの共著になっている。中央公論社、1979年刊。

この本は、初孫千里に捧げられている。三部から成り、第一部「時間と人間」と第三部「時間と自然」が憲、第二部「時間と仏教」がドロテアの筆になる（伏見はヒルデさんとばかり思っていたが、ここではドロテアになっている）

上記国際時間学会というのは、

『The Voices of Time』 J.T.Fraser編：George Bragiller刊、1966年刊。

これには日本人では中村元氏の「Time in Indian and Japanese Thought」と渡辺君の「Time and the Probabilistic View of the World」が含まれている。

『The Study of Time』 J.T.Fraser, F.C.Haber, G.H.Miiller 編 Springer - Verlag (Berlin, Heidelberg, New York) : 1972年刊。

これは、Proceedings of the First Conference of the International Society for the Study of Time, Oberwolfach (Black Forest)- West Germany. 1969年8月31日から9月6日まで。会長は G. J. Whitrow、

会計渡辺憲、事務 Fraser をまとめたもの、渡辺君の寄与は「Creative Time」で、過去と未来の問題、早いか晚いか、時間の前後の問題を論じたもの。

『The Study of Time II』 J. T. Fraser, N. Lawrence 編 : Springer - Verlag 1975, Proceedings of the Second Conference of the International Society for the study of Time, Lake Yamanaka - Japan.

これが渡辺君が組織を引き受けた国際会議の記録で、1973年7月1～7日山中湖畔の富士ホテルで開催された。もちろん多くの日本人が参加した。募金などに活躍したのは、上智大学の柳瀬睦男君や、東大の村上陽一郎君たちだった。渡辺君の論文は、「Causality and Time」 — ここで私は、彼が Michael S. Watanabe と書いているのを見て、彼がキリスト教に入信したのを知った。この時、彼はハワイ大学の教授を、奥さん共々、していたのである。

以上殆どが時間に関するものであったが、もう一つ別の分野のもの、つまり情報理論分野のものがある。

『Knowing and Guessing, a Quantitative Study of Inference and Information』 : Wiley 1969 年刊。

この本は、既に亡くなった母上に捧げられている。序文によると、1959年以来、エール大学、コロンビア大学、ハワイ大学の電気工学科、応用科学、哲学、物理学の分野の講義としてまとめたものを集めたのだという。そ

してこれはアマチュアの学問で、悪いところも良いところもあるだろうとしている。この本の日本語版があるはずだが手許にも見つからなかった*。

渡辺君は1950年にアメリカに渡った。その前からGHQに出入りして、アメリカ語を磨いていたようである。彼はフランスとドイツに留学し、ヨーロッパはよく知っているが、アメリカを見ていないから、アメリカに特別な関心があったのであろう。始め、西海岸の軍関係の学校で教えていたが、やがて東海岸に移り、エール大学などで講義をした後、IBMのニューヨーク郊外の研究所に導入った。ここは天国のようなところで、サラリーは永久に保証されていて、好きなことをやればよいというところであった。その頃、お邪魔したことがあるが、庭付きの立派なお宅で、屋根に登って日曜大工をしているのを見た。しかしパートタイム夫婦で、週末にはニューヨークのずっと南に奥さんが語学の先生をしているところまで迎えにいかなければならなかった。

その天国のIBM研究所で具合の悪いことが起って辞め、最後にハワイ大学に落ち着いた。ここでは夫婦一緒にのところに住めて、腰が落ち着いて、十何年も過した。その間、日本が近い

*『知識と推測』（上、下）村上陽一郎、

丹治信春共訳、東京図書、1987年9月版。ただし、同じものが1974年には4巻本として出版された。

から、東京とホノルルの間を絶えず行ったり来たりしていた。そして「フランス社会主義の進化」の跋を書いた1990年頃から、段々に衰えていったのである。

私は渡辺君から、以上述べたように沢山の本を頂いている。それにはどれにも、「伏見康治

大兄へ」という献辞が書かれている。それに対して私はほとんど彼に献本をしていないのである。あんなに愛情の深い人に私は十分応えていなかったのではなからうか、幽明境を異にして、私は心からお詫びをしたい。 □

II. 十年の学友伏見君の横顔*

渡辺 憲

文芸作品の批評に作者の人柄や伝記的記述を加えるのは無用で害悪さえ付加するという説がよくある。しかし、作者の個人的側面は読者にとって非常に興味ある話題であり、その記述は要求される十分な理由があると思われる。作品の価値は作品自身が担うべきであるとしても、作品の深層の理解には個人的背景が大いに役立つのは否めない。それと同様な理由によって、科学的エッセイの深い理解に対しても科学者自身の個人的背景の知識が役立つであろう。もちろん私自身の記述には私の片寄った偏見が多分に含まれているのは避けられないから、読者は十分に眉に唾して読むことをおすすめする。

思い出してみると、あまり運が良かった事件の少なかった私ではあるが、これだけは確かに運が良かったなと思われるのは、伏見さんと中学一年（七年制高校専常科一年）から大学卒業

*本文は「伏見康治著作集第3巻—数学と物理」（みすず書房、1986年12月版）に「解説」として書かれたものである。

まで同級生であったことである。高校時代の彼の魅力は、彼の孤高性であった。他の学生が華やかな団体ゲームなどに熱中していた時に、彼は運動場の一角で黙々と一人で走り高跳びを「研究」していた。彼は他人との競争に勝とうとするのではなく、執拗に自分で新しい跳び方を案出したり実験したりして楽しんでいった。普通の人が新宿から幡ヶ谷まで電車で通っていた時に、彼は首尾一貫して断乎として片道三十分の道を歩き通した。それがもとになって多くの同級生も伏見さんの真似をして徒歩通学するようになった。こう書くと彼は社交性がなかったように聞えるかも知れないが、そうでもない。彼の小学時代に一方のボスとなって他のボスと張り合ったことなども伝えられているし、高校時代全期を通じて総代に選出されていて、人気があり、同僚の一番上に立つことは当然だと思っていたのであろう。

大学時代の彼がノートなど取らず、新聞のチラシ（当時はこの頃のような豪華なものではなく白黒印刷であり、裏面は白だった）二、三枚

に数行チョコチョコと書いて、それをポケットにねじ込んでいるに過ぎなかったことは有名である。何でもわかっている、何でも記憶している彼には大学の講義なんか無用のものであったのだろう。私自身にとって、物理を教わった先生は誰かと聞かれば、本郷の先生は一人もなく、ただ一人伏見さんだと答えるであろう。彼の書いたものを読むと、大学時代に渡辺と二人でプランクの教科書を輪読したと書いてあるが、これは彼一流の謙遜であって、実態は私の側が一方的に教えてもらうことになった。そんなわけで私にとって伏見さんは偉大な巨匠であって、これを比較するのに誰を持ってくればよいかと考えて、答えが出なくて困ったことがしばしばであった。絵が上手なことからの連想かも知れないが、万能天才と見られるレオナルド・ダ・ヴィンチは伏見さんに似ていたのかなと思ったこともあった。

私は最近十年くらい、これも東京高校の二年生の同窓の宮城音弥さんの影響で、学者の性格学的分析に興味を持ち始めた。クレッチマー・宮城の説によれば、性格は三つの型、分裂質、躁鬱質、粘着質に分けられ、この三種に大体対応する体型は「ヤセ型」、「フトリ型」、「筋骨型」に分けられる。伏見さんは外見的には筋骨型であるが、粘着型の性格の普通の特徴は（偏執性以外には）あまり強くは見られない。孤高癖は分裂質を思わせないわけではないが、大体においては躁鬱型が伏見さんにはあてはまると見受けられる。現代の日本の物理学者には分裂型の典型のような方々もおられる。例えば

山内恭彦、高橋秀俊、湯川秀樹などを挙げることができよう。伏見さんは、他人との間にへだてをおかず、社交的で「あたたかみ」があり、大体躁鬱型と見てよいであろう。彼がちょっと引込み思案で、孤立癖が出てくるのは、彼の幼時からの生い立ちなどの影響で、鬱状態が現われる割合が多いからであろう。

彼の父は、夢見る、愉快な、雄飛型の人であった。事業に失敗したが、成功していれば大型の成功者となり、人に仰がれるような大人物になったであろう。彼の母は、実直で、誠意と忍耐をもって苦しい実生活のもとに多数の優秀な子供を育てた隠れた英雄であった。伏見さん自身は、子供の時に養子にやられて、養家に実子が出来たので、家を飛び出して警察に補導されるというような、心の傷手を負わされた。彼はそんなことで鬱型の時が多く、人前で華やかにしゃぐというようなことを避けたのであろう。しかし、人と一緒に愉快地騒ぐというようなことにはあこがれることがなかったのではない。

宮城さんは天才型と能才型という区別をする。この区別はいろいろ適用されて意味の深い分析に役立つが、いつでも天才型が能才型より優れているような印象を与える欠点がある。天才型は分裂型につながり、能才型は躁鬱型につながるわけであるが、日常会話的に「天才」といわれる人の多数が能才型である。例えば、野口英世、ゲーテ、ダーウィン、朝永振一郎等々多数がこれである。この型で「天才的」な仕事をしたのは、何かの劣等感に押されて、これを克服しようとする努力が補償となって、大事業をな

しとげる場合が多いと宮城さんは言う。野口の場合にはヤケドで生じた左手の異常が一生つきまどって、深い劣等感を生じさせた。田中角栄はドモリに悩まされて、これを克服しようとして、自ら絶大な影響力を持つ能力を作り上げた。朝永は東京生れであったが、京都に転校して、当分他の子供に疎外されたとひがんだ。そして、彼の良友だとされている湯川秀樹の天才的な優秀さに圧倒されて深い劣等感を育んだ。伏見さんの場合は、父親の経済的失敗、養子縁組の破綻等々、隠された劣等感の原因となる多くの要素がある。アメリカのある心理学者は他人が見て笑うようなヒゲや髪型を得意とするのは劣等感の現れだといった。最近、小野健一氏との会話で、レオナルドには劣等感を生むような欠点はなかったらうという私の質問に対して、小野さんは、実はレオナルドには一つの劣等感があり、それはすべての学者先生に対するものであったという。彼は全部自己流であった。

伏見さんの書いたものは、ほとんどすべて、用心深く自分を隠すように書いてあるが、私の知っている限り一つの例外がある。それはこの著作集の第1巻にある「北海行」という一文である。これは大学卒業直後に書かれたもので、意識的に文芸的なスタイルで纏められているが、かえって稀に見る彼の自己解剖となっている。簡単にいうと、これは恩師山内恭彦に対する性格的衝突を描いているが、ここで伏見さんは明瞭に自分の劣等感を承認している。

そういうわけで、彼の最近の参議院議員当選は、彼の永年の劣等感のカタルシスの役を果し

たと見るべきで、彼の個人的幸福という点では喜ばしいことであるが、彼のような稀有の天才的知能をくだらない政治的活動に浪費するのは客観的に見てはなはだしく無駄な浪費であると思われるのは、この評者だけの感想ではないであろう。

さて、ここまでが準備で、これからが私の「解説」となる段であるが、今読み返してみると、どの文章も非常に明快でやさしく書かれているので、今さら解説を施す必要などはない。それで、その代り、伏見さんの科学的著作全体に対する感想を述べておきたい。この巻にははいていないが、彼の名作「ろば電子」、「確率論及統計論」をもこの評論の対象に入れたい。教育的価値という点では彼の講義をお弟子さんたちが纏めた統計力学の教科書を忘れることは出来ないし、その中に彼の独自の意見がたくさん含まれているが、芸術的見地からみると美しい本とはいえない。これに対して、前二著は美しく楽しい作品である。

彼の作品には次のような特徴があると思われる。

- (1) 非常に広い学問的視野、博学さ、学問の全体的把握の深さ、
 - (2) 論点の斬新さ、奇抜さが人を驚かす、
 - (3) 論理的演繹の精密さよりは、プラグマチックな有用さ、帰納的独創性を大事にする、
 - (4) 絵画的な審美性を常に考えている。読者をエンタテインすることを忘れない、
 - (5) 小説的サスペンスを常に保たせている。
- 簡単に言えば、稀有な聡明な教育者の作品であ

るということになる。だから彼が他の先生のことを書いているところは特におもしろい。

大体東京高校の出身者は、学生時代から将来社会のリーダーとなるように教育されているので、社会国家をどうするかということを忘れることが出来ない。それだから、伏見さんの生涯にも、科学に関係のある範囲であるが、一つの社会に対する主義主張があり、彼は彼なりに誠心誠意実行に移そうと大変に努力してきた。しかし彼の主義主張が世間に理解され、実際に社会に多大の影響を及ぼしたとは見られない。彼の主義主張には、普通の社会人や政治家には理解し難い二律背反性が含まれているからかも知れない。

例えば、彼は

- (1) 科学が戦争のおかげで発達することを認めると同時に、科学が戦争に身売りすることに反対する。
- (2) 原子爆弾に反対するが、原子力発電の重要性を強調する。
- (3) 文部省的文教政策に反対して学術会議の立場を守ろうとしたが、官僚による科学の組織化そのものには反対しなかった。
- (4) 原子核融合を推進させたが、原子核分裂には反対した。
- (5) 常に弱い者、貧しい者、造反者の側に同情したが、同時に強い者、富める者、権力者に協調した。

そのようにして伏見さんは、絶大な努力にもかかわらず、実際の社会を大して動かすことには成功しなかった。一つの人間的浪費である。

これは渡辺の評言によれば、「伏見さんは一生政治に介入することを願っていたが、晩年実際に介入する機会が与えられた時に、大きな失望と失敗に直面せざるを得なかったのは、プラトンの場合によく似ている。プラトンは、その失意の中にも彼の著作の執筆をやめなかった。何とぞ、伏見さんよ、政治家や、愚鈍で傲慢な官僚を教育することなどは断念して、実際にあなたのことを理解して善用するような科学者を教え続けて下さい。あなたには、天から授かった、あなたの英知に対する責任があるのです。」

追記 罵られるのも悪いが、罵すのはもっと悪いというのは古今を通じて真実であろう。そういう見地から見れば、原子爆弾という武器を人類に与えるという罪悪を犯した責任の大半は科学者をおだてて人種的偏見という劣等感を動員してその目的を達した政治家にあるといわざるを得ない。煽動された科学者の大部分はヨーロッパ系の少数民族であって彼らがかくもよくまとまって協力したのは被害意識に由来するドイツ人憎さにほかならなかった。こういう見地から歴史を解釈すれば、原子爆弾が日本に落ちたという報道を聞いて、「ヴェーヴェー」（「痛い痛い」、「しまった、しまった」というほどの意）と言ったという有名なアインシュタインの謎のような言葉が理解出来る。アインシュタインの日本人びいきは周知の事実で、もしも彼が自分を正直に分析することが出来たならば、彼の内心思ったのは、「私は世界平和と

か何とか大きなことを言ってきたが、私を動かしたのは実はドイツ人に対する被虐コンプレックスにほかならなかった。この私の弱点を利用した政治家に騙されたのは残念千万」というところであつたらう。事は原子爆弾ほどの大事件ではないが、日本の政治家が学者や女優の虚栄欲（大概の場合、何か自分の劣等的地位を一挙に政治家なみのグラマラスな水準にして世間に自己を宣揚しようという劣等感解消への欲望）を煽情して、あるいは閣僚にするとか、参議院

議員に推薦するとかして、実はそれら学者やタレントから何一つ学ぼうとはせず、安上りの集票器として利用しているのは、大変な欺瞞行為である。学者には政治家よりもっと高貴な使命があるのである。個人としての政治家がすべて悪人だというのはないが、職業集団としての政治家は犯罪グループである。こういう集団に尊敬を払う社会習慣やこれを煽るマスコミをも罪をまぬがれない。 （ハワイ大学名誉教授）

□